

284 肺癌術後症例における骨転移の検討

笹沢輝昭(結研 放), 杉木孝次(結研 放),
片桐史朗(結研 内), 和田雅子(結研 内),
小山 明(結研 外)

肺癌の術後症例において、その予後を左右するものとして骨転移は重要な因子の一つである。

そこで今回我々は昭和54年1月より昭和58年5月末までの間に当院にて骨転移なく切除され、現時点で転帰の明らかな114例(腺癌64例、扁平上皮癌37例、大細胞未分化癌6例、小細胞未分化癌7例)について全身骨シンチグラフィーを施行し、組織系別、手術病期別との関連で、骨転移の頻度、骨転移の出現時期、合わせてその時期の血中CEA値についても検討を加えた。

285 肺小細胞癌患者の骨及び肝シンチ検査の意義

北野 保, 福永義純, 木村聖来, 中筋孝史,
浅井浩次, 一之沢昭夫(大阪府立羽曳野病院R1)
高田 実, 福岡正博(同第二内科)

肺小細胞癌は、早期より脳、肝、骨、骨髄などへの遠隔転移が多い悪性度の高い肺癌として知られている。我々は、肺小細胞癌患者107例(Limited Disease 34例, Extensive Disease 73例)に対し治療前に肝及び骨シンチを施行し、その陽性率、腫瘍効果、生存期間を検討したので報告する。

①陽性率：肝シンチ、骨シンチの陽性率はそれぞれ33.0%、37.8%であった。②腫瘍効果：肝シンチ陽性者の腫瘍効果は63.6%、陰性者は67.2%と差はなかったが、CR率はそれぞれ0%、17.9%となり陰性群で高かった。同様に骨シンチ陽性者の腫瘍効果は64.9%、陰性者は67.2%と差はなかったが、CR率は2.7%、18%と陰性群で高かった。③生存率：肝シンチ陽性群、陰性群のMSTはそれぞれ32週。骨シンチ陽性群32週、陰性群33週であった。両検査ともに、2群間で有意差は認められなかった。④肝シンチ、肝CTの一致率：肝シンチと肝CTをほぼ同時期に施行した症例は68例あり、その一致率は77.9%であった。⑤肝、骨シンチの転移部位、治療開始前後の変化なども検討した。

286 原発性肺癌の肺換気・血流functional imageと肺機能

末松 徹, 檜林 勇, 末松知恵子, 田中 豊,
石堂伸夫, 井上善夫, 西山章次(神大 放)

原発性肺癌40例の肺換気・血流スキャン施行に際し $\dot{V}$, $\dot{Q}$, $\dot{V}/\dot{Q}$, MTT等のfunctional imageを作成した。また、同時期に肺機能検査を施行し、functional imageとの比較検討を行なった。 ^{81}Kr による患側肺 $\% \dot{V}$ は $\% V_C$ と $\gamma = 0.666(P < 0.005)$, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ による $\% \dot{Q}$ も $\gamma = 0.711(P < 0.005)$ と有意な相関を示した。 $\% \dot{V}$, $\% \dot{Q}$ ともFEV_{1.0}%と相関性はなかった。relative MTTとFEV_{1.0}%の間には $\gamma = -0.433(P < 0.1)$ の相関が見られた。TNM病期分類、Ⅲ・Ⅳ期ではⅠ期及びⅡ期に比し、明らかな換気・血流低下をみた。T因子については、T1とT2では有意差なく、T3で著明な低下をみた。N因子ではN2症例で有意な低下を示した。13症例で放射線治療前後、そのうち7例で3ヵ月後に肺換気・血流スキャンと肺機能検査を行なった。治療効果及び放射線肺障害の評価にfunctional imageは非常に有用であった。17症例で $\dot{V}/\dot{Q}$ functional imageをもとに、 $\dot{V}_A/\dot{Q}_c$ 分布の定量評価を試み、4パターンに分類した。Ⅰ型(分布拡大型)8例、Ⅱ型(肺泡性死腔型)7例、Ⅲ型(シャント型)1例、Ⅳ型(肺泡性死腔+シャント型)1例であった。